



平成23年度 ブラジル通信
11月19日(土)~11月25日(金)
No. 12
発行者: 宮本 朋子

1日制の学校訪問

マリンガ市の1日制の学校である Silvano Fernandes Dias 初等学校を訪問しました。今年から開校したばかりの学校ということで、他校より施設が充実しており、新しい教育に対する先生たちの熱意がとても高いです。2016年までに完全1日制を目指すマリンガ市にとっては、先進的な学校です。

全クラスでの
取り組み



クラス全員で協力して作りました

職員数	51人 (内教員21人)	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい学校ということで、教育局長から異動の話がきたそうです。もちろん断ることもできるそうです。 ・ブラジルでは、半日(4時間×5日=20時間)勤務したら、別の学校で残り半日勤務する先生が多いですが、この学校では、1日勤務(8時間×5日=40時間)の先生がほとんど。 ・1日勤務の場合、授業研究や教材準備の時間が、勤務時間内に週8時間保障されています。(半日の場合は、週4時間。)
児童数	約300人 (日系人約30人)	<ul style="list-style-type: none"> ・1日制の学校ということで、他地域からも入学が可能。しかし、希望者が多く、現在も170人の児童が待機中です。
学年	1年~4年	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度から1年~5年へと移行する。
留年	18人	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生は留年なし。 ・出席率75%以上と成績60%以上なければ、留年。 ・APOIOクラス(遅進児指導)は、教科学習以外の授業のときに、取り出されて行われています。
時間割	①② 7:30~ 9:20 放課 9:20~ 9:40 ③④ 9:40~11:30 昼食・歯磨き・昼寝 11:30~13:00 ⑤⑥ 13:00~14:40 放課 14:40~15:00 ⑦⑧ 15:00~17:00	<ul style="list-style-type: none"> ・2コマずつ連続で授業が組まれています。その時間配分は、担当の先生に任されています。 ・教科(ポルトガル語8、算数7、地理3、歴史3、理科3、体育1、美術1)の他、図工、レク、英語、読書、チェス、ドミノ、スポーツ(男:サッカー、女:体操)、コンピュータ、文章読解(各1)などの授業をします。※数字は一週間に行われる授業時間数。 ・コンピュータの台数が少ないため、クラスを半分に分けて行います。(A:前半コンピュータ、後半授業、Bは反対。) ・全校一斉放送で、音楽を流して、約1時間お昼寝をします。 ・登校した時に朝食、下校する前に夕食、放課に軽食を食べます。
特別支援学級	8人(先生1人)	<ul style="list-style-type: none"> ・週に2回、2時間ずつあり、通常は普通学級で学習しています。

1日制の学校ということで、行事などにも力を入れてできるようになったといえます。しかし、教室の数が不足していることから、APOIOクラスは廊下で行われていました。教室の増設、時間割の見直し(午前:教科学習、午後:活動)などを行い、より良い学校づくりを進めていきたいと、意欲的な学校でした。



放送機器も設置されていました



本を読む先生
教室にマットをひいてお昼寝タイム



コンピュータで算数の学習

帰国した日系人の方との面談

親身になって考えてくれる校長先生



マリンガ市に住む日本から帰国した日系人の方と面談を行いました。今回は、立場や環境によって感じ方、考え方が違うのではないかと思います、マリンガ市の学校に通う児童と私立学校に通う児童生徒、出稼ぎ経験者（大人）にそれぞれ話を伺いました。

日系人の多くは、私立学校に通っています。そのため、マリンガ市の学校にいる日系人は、ブラジルで生まれ育った子、または日本でブラジル人学校に通っていた子がほとんどでした。また、日本から帰国した児童のいる学校でも、親が就学年齢に合わせて帰国しているため、特に問題はないとの返答が多かったです。その中で、José Marchesin 初等学校に日本の学校に通っていた児童がいるということで、会いに行ってきました。

	カウアン	ハファエロ	ガブリエル	ルーカス
住んでいた場所	4人とも覚えておらず、学校側にも記録がないそうです。			
学年（年齢）	3年（7歳）	2年（6歳）	1年（6歳）	2年（6歳）
帰国日	2年前	去年3月	今年	去年10月
日本での生活	・日本語しか話していませんでした。	・幼稚園や学校では日本語。家ではポルトガル語を話していた。	・学校では日本語。その他に、英語とポルトガル語を習っていた。	・日本語しか話していませんでした。
帰国後の生活	・ポルトガル語の学習に少し遅れがあるため、APOIOで補習中。 ・今も日本語が話せる。	・ポルトガル語が話せるため、すぐに適応できました。 ・日本語はまだ少し話せる。	・本当は2年生に入る年齢だが、親が1年生からやるように頼んだ。 ・日本語はペラペラ。	・すぐに適応できた。 ・日本語はほとんど話せない。
今後について	・食べ物がおいしいから、日本に住みたい。 ・日本語を勉強したい。	・祖母が日本にいますため、日本に住みたい。 ・日本語を勉強したい。	・日本が大好きだから、住みたい。 ・日本語を勉強したい。	・日本は、遊びに行きたいけれど、住みたいはなし。 ・ブラジルの方が好き。

次に、São Francisco Xavier 私立学校に通っている児童と話をしました。この学校は、幼稚園から高校まである2部制の学校で、日本人の神父によって建てられました。そのため、2年生～5年生を対象として、週に1回（45分）日本語の授業が行われています。おりがみや歌など、簡単な会話を交えながら日本文化を中心に教えているため、校内を歩いていると、どの子も日本語であいさつをしてくれました。帰国児童が安心して学べる、環境の整った学校だと思いました。



この学校で学習しているりゅうじ君とたけし君は、10歳（6年）の男の子。りゅうじ君は、1年前まで愛知県の知立市にある、ブラジル人学校に通っていました。父親の仕事の都合で帰国しましたが、日本語とポルトガル語が話せたため、帰国後は特に問題なく学校に適応できたといいます。一方のたけし君は、半年前に帰国。静岡県掛川市にある日本の学校に通っていました。家庭ではポルトガル語を話していたそうですが、学習のポルトガル語は難しく、帰国後の半年間はとても苦労したそうです。午前中に通常授業を受け、午後ポルトガル語の文法を学習する個別指導を毎日受けたことで、今では授業についていけるようになりました。二人とも帰国当初は、ブラジルが嫌で日本に帰りたかったそうですが、現在は、このままブラジルでがんばっていきたいという意思をもっています。

今回の面談を通して、帰国時の年齢だけでなく、帰国後の環境がその後の子どもたちの考え方に大きく影響していると感じました。学習環境やサポート体制が整っている私立学校では、帰国児童生徒は適応しやすい傾向にあります。各学校の校長先生に対応が任されている市の学校では、サポ

ートできる範囲も限られてきます。さらに驚いたことは、教育局で帰国した人への対応を聞いたところ、①日本語学校や私立学校を紹介する ②金銭的な問題で私立学校に通えない人には、保護者が子どもとともに学校へ通いサポートするように話す ③学校にサポートをお願いする なのです。また、ブラジルは移民の国でもあるので、日系人だけを特別扱いできないというのも理由の一つのようです。最後に、出稼ぎ経験者4人との面談です。

	Hさん(男45歳)	小山さん(女43歳)	伊東さん(女47歳)	三沢さん(女47歳)
出稼ぎ経歴	・6年日本で働いた後、一時帰国。その後再び来日し、6年働いた。	・5年日本で働いた後、出産のため帰国。その後再び来日し、12年働いた。	・16年日本で働き、途中何度か休暇帰国。	・18年日本で働き、途中出産や子どもの学校のため帰国。
出稼ぎ場所	横浜→千葉 (2003年帰国)	山形→静岡→神奈川→長野(2009年帰国)	神奈川→埼玉 (2005年帰国)	静岡→山梨→宮城→岡崎(2008年帰国)
帰国した理由	・子どもを育てるのにブラジルがいいと思ったから。日本の学校はお金がかかることも理由の一つ。	・日本での仕事が無くなってしまったため。	・ブラジルで嫌なことをたくさん見せて、強さを身につけさせるため、子どもが就学前に帰国。苦勞させたい。	・父親が病気になったことと、子どもが高校入学するため。
子ども	9歳(日本生まれ) ・1歳のとき帰国。 ・3歳から日本語学校で勉強中。日本に行きたいと思っている。 ・私立学校に通学。	16歳(ブラジル生まれ) ・5歳の頃来日。 ・中学1年のとき、母親は帰国、日本に残り父親と暮らす。その後高校1年を中退したため、今年の11月帰国。日本に帰りたいと強く願っている。	12歳(日本生まれ) ・5歳のとき帰国。 ・ポルトガル語が全くわからない状態で帰国したため、未だに日本のテレビを見ている。 ・7歳から日本語学校で勉強。日本に行きたい。 ・私立学校に通学。	兄:17歳(ブラジル生まれ) 妹:7歳(ブラジル生まれ) ・日本とブラジルを行ったり来たりしているため言葉で苦勞した。 ・私立の学校に通学し、兄は試験勉強中。日本語学校で勉強していた。
子どもの将来に対する考え	・世の中の役に立つ人になってほしい。世界に目を向け、日本にも行ってほしい。	・ブラジルで家庭をつくらせて暮らしてほしい。 ・母親のそばにいてほしい。	・子どもが選んだ人生を応援したい。日本に住みたければ、一緒に生きていきたい。	・兄は、電気関係のエンジニアになってほしい。ブラジルで生活して行ってほしい。

面談の中で、伊東さんの話にハッとさせられました。それは、このまま日本で子どもを育てていけば、引かれたラインに沿って苦勞なく大人になれますが、何でも揃っており、全部コーディネートしてくれる日本では、いざ壁にぶつかった時が怖いということです。そのため、小さいうちから苦勞させることで、自分で全てにぶつかり、体で覚え、精神的に強くしたいとの考えから、帰国したのです。この話を聞いて、環境を整えることも大切ですが、あえて大変な環境に入れ、自力で乗り越えさせる経験を積むことも、今の子どもたちの生きる力を育むためには必要だと思いました。



ぷらっとブラジルク・イ・ズ!

バスターミナルでバスを待っているとき、公衆電話のとなりに箱のようなものを発見しました。これは、一体何でしょう？

- ①ゴミ箱
- ②郵便ポスト
- ③新鮮卵の販売機



答え：②

(街角で見かけることができますが、このポストに手紙を入れてもいつ届くか不明で、その上届かないこともあるそうです。また、ブラジルの郵便事情はあまりよくなく、小包などは届くのに2~3ヶ月かかります。私の場合、5日で届くという航空便で送ったところ、届くのに1ヶ月かかりました。また、日本からの郵便物は途中で開封されることがあり、中身によっては高い関税がかかることも。私の友達もじゃもじを20個日本から送ってもらった時、販売目的だと思われたようで、かなり高い関税を支払いました。その上、高価な物品は、抜き取られてしまうこともあるそうです。恐るべしブラジル!)